

緑のまきば

1982 119

小金井緑町教会
 小金井市緑町四一十六一三三
 電話〇四三二一八一七九六一
 編集 牧師 山本圭一

一つの川がある

— 聖地につかわされて —

山本圭一

I

ガリラヤの三月下旬は、雨季が終りに近づく頃であった。十一月から四月初めにかけての雨季は、日本では冬から春にかけての季節であるが、毎日、雨が降り続くわけではない。快晴のガリラヤ湖をカペナウムから、舟でテベリヤに渡る空は、真青に澄み、山上の垂訓教会のあたりは、緑の若草に包まれ、色とりどりの花が咲き乱れていた。エルサレムからユダの荒野で見た岩砂漠の荒々しく乾燥した景観と比べると、何とみずみずしいことであろうか。

II

しかし、この季節の変わり目に死海の西岸エンゲデで出会った雹と雨には驚いたものだ。一天にわかにかき曇ったかと思うと、すざまじい勢いで雹が車をたたいた。一時間もしないうちに雨はあがった

が、ずつと車を運転してくれたヨラムさんもこれには驚いていた。それは十一月頃の最初の雨の烈しさを見せつけるようであった。昼なお暗い空に稲妻が鋭く走り、それを追うように雷のすさまじい音が響くのである。最初の雨はヨレーといわれるが、その意味は射手である。射手が思いきり弓をひきしぼって矢を射るように、ヨレーは地上のあらゆる物を獲物に見たてて、烈しく襲いかかる。やがて岩肌はうるおい、オリーブやナツメ椰子の木々は、新鮮な輝きを放つ。ちょうど車の左手に屏風のように連つていた岩間から、二すじ三すじ滝が現われ始めた。荒野の潤谷に突然顔をのぞかせた水である。あれが、イスラエルの人々をかつて驚喜させたキシオン川の再来なのか。「主よ、あなたがセイルを出、エドムの地から進

まれたとき、地は震い、天はしたり、雲は水をしたらせた。……キシオンの川は彼ら(カナン軍)を押し流した、激しく流れる川、キシオンの川。わが魂よ、勇ましく進め。」(土師記5章1-21)

ガリラヤの春は、エルサレムやユダと比べて何と美しく潤いをたたえていたことか。自然が人格に与える影響を重要視しがちな私たちに、雨季の終りに輝くガリラヤの太陽のまぶしさは、福音の持つ究極的な救いを象徴していた。

III

これより先、私たちの訪れたエルサレムは、いうまでもなく旅のめあてであった。ゲッセマネ教会オリブ山、アブサロムの墓、嘆きの壁、シオンの丘、洗礼者ヨハネの生誕教会、マリヤの訪問教会、エツケ・ホモ教会、鶏鳴教会、アントニアの塔、岩のドーム、それに聖墳墓教会とヴィア・ドロッサ

(主の十字架への悲しみの道)。行を共にしたカトリックの神父方とシスターたちは、毎日ミサを絶やさず、その典礼に陪して教会史の多くが、私の心に去来した。

「いつくしみの秘跡、一致のしるし、愛のきずな、キリストが食され、心は恩恵に満され、そして未来の栄光の保証がわれわれに与えられる復活のうたげ。」

巡礼しつつ、黙想し、かくれて涙するシスターたちの顔は、平安と喜びに輝いていた。聖霊の清い泉を、そこに見る思いであった。

IV

「ゆるやかに流れるシロアの水(イザヤ8章6)」「エルサレムに来た時から、私は、潤谷に溢れた水や、ガリラヤ湖の豊かな水量を想像しながら、やゝ赤味を帯びたエルサレム石に象徴される、あの乾季の徹底した渴きをいやす水のことを、考えていた。オリブ山とエルサレム旧市街を距てているケデロンの谷にあつたギボンの泉は処女の泉とも呼ばれる噴出泉であった。ヒゼキヤがアッシリヤ軍の攻撃に備えてこの泉を閉じ、トンネル水路をシロアまで拓いて、水を流した。その古池(イザヤ22章11)に至る水道の端で、イザヤはアハズに会つたらしい。

「一つの川がある。その流れは神の都を喜ばせ、いど高き者の聖なるすまいを喜ばせる」(詩46篇4)。有限な時が永遠の水に潤されて、人生の渴きはいえる。それは又、古今東西を貫く人間の絶唱でもある。荒野と乾いた地とは案じしみ、砂漠は喜びて花咲き、サフランのように盛んに花咲く。省みて聖地の旅は、人生の旅と、いつまでも二重写しのように、続く。